

教 育 研 究 業 績 書		
2019年5月1日		
氏名 安村直己 印		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
臨床心理学、健康心理学、家族臨床心理学	心理療法の治癒要因、自己愛の病理、家族力動、心理教育的アプローチ、自己の発達と病理	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例	2011年4月～ 2015年7月	「健康心理カウンセリング」の講義では、ライフサイクルに沿った心理的課題に伴う臨床例を守秘義務に配慮しながら具体的に紹介し、その事例に関する感想を必ずレポートさせ、それに対し教員が詳細なコメントやその学生に向けてのアドバイスを毎回全員につけて返すことを続けた。そのことによって受講生の講義への動機づけが明らかに向上し、レポートの内容に進歩の見られた学生も多かった。
2 作成した教科書、教材  西村健・高橋依子・白樫三四郎(編著) メンタルヘルスへのアプローチ(ナカニシヤ出版)	2010/3/1	甲子園大学の教授陣で分担執筆したメンタルヘルスに関する講義のために作られた教科書である。安村は「家庭ライフサイクルにおけるメンタルヘルス」(pp. 41～49)を分担した。(編者西村健・高橋依子・白樫三四郎・分担執筆者：内田由紀子、大川清丈、角田豊、竹西亜古、藤田綾子、藤本修など)
3 教育上の能力に関する大学等の評価	2013年、2014年	毎年行われる学生による授業評価で、1回生の必修専門科目である「健康心理学概論」(安村担当)の2013、2014年度の評価で、「総合的に満足できた」「そう思う」と「どちらかというとそう思う」を合わせれば2年連続で100%の学生が満足できたと答え、好評価を得た。
4 実務の経験を有する者についての特記事項	2011年4月～	2011年より毎年、心理学部公開講座において各種講演を行ってきた。2014年3月には、甲子園大学教職員研究会において、学校教職員のメンタルヘルスに関する教育講演を行った。
5 その他		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許	1989/3/1	臨床心理士資格(登録番号00978)
2 特許等		特記事項なし
3 実務の経験を有する者についての特記事項	2013年4月～	日本精神分析的な心理療法フォーラムや日本精神分析的な自己心理学協会主催のワークショップや研究会で症例報告を行った。
4 その他		特記事項なし
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項		

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1. 「臨床心理学体系 第4巻 家族と社会」	共著	1990/10/1	金子書房	家族への心理療法的アプローチとして家族療法を取り上げ、精神力動的アプローチの理論と実際について解説した。力動的な家族療法は精神分析医ボーエンの家族システム療法がその代表であり、ボーエンの多世代投影過程や三角関係化の理論を解説し、臨床例と共にその臨床的有効性を示した。また家族システム療法の視点はチーム治療に有効であることを臨床例を挙げて提唱した。(編集岡堂哲雄 執筆者馬場禮子・岡堂哲雄・滝口俊子・下坂幸三・松田孝治・安村直己・石川元：全289ページ中、pp176-194. 第IV-3章の「精神力動的アプローチ」を担当した。)
2. 「臨床的共感の実際－精神分析と自己心理学へのガイド」 (M. Berger)	共訳	1999/6/1	人文書院	精神分析家のBergerが精神分析的な治療における「共感」の治療的な機能について古典的な精神分析理論と自己心理学理論の両視点から広範囲に検討した著書を共訳にて出版した。特に本書は理論考察ばかりでなく、臨床的な記述に溢れ、豊富な臨床例と共に「共感」の重要性を提起している。またスーパーヴィジョンにおける共感についても取り上げるなど、新しい試みも加えられている。(訳者：角田豊、竹内健児、西井克康、安村直己、藤田雅子。15章中、安村は13, 14, 15章 pp205-253を担当した。)
3. 「自己心理学入門－コフート理論の実際」 (A. Wolf)	共訳	2001/10/1	金剛出版	精神分析的自己心理学を創始したKohutの盟友である自己心理学派の重鎮、Wolfが自己心理学の基本概念と臨床を概説した入門的な概説書を角田豊氏と二人で訳出した。Wolfは自己対象や自己対象関係、自己対象転移などの自己心理学特有の概念を分かりやすく概説し、自己対象欲求の発達ラインについてや現実の捉え方など独自の視点なども提示しており、自己心理学理論の発展に寄与している。(原書全187ページを安村が全訳し、角田氏と共に推敲を行った。)
4. 「体験から学ぶ心理療法の本質－臨床における理論・技・芸術」	共著	2002/2/1	創元社	心理療法の本質的な側面をスーパーヴィジョンを通してスーパーヴァイザーが体験した側面やさまざまなセラピスト訓練の中で体験した側面から捉えるようとする試みである。従って、本書は心理臨床家東山紘久氏に教えを受けた心理士たちが自身の指導者との体験を基に考察を深めたものであり、そこには心理療法家の成長過程に伴う葛藤や苦しみなど、心理療法の本質にかかわることが如実に示されている。(監修者東山紘久：執筆者 梶谷健二、西井克康、川原捻久、森田喜治、安村直己ほか。安村は「スーパーヴィジョンで学んだ面接技法と心理療法の本質」 pp242-259を担当した。)
5. 「自己心理学の臨床と技法－臨床場面におけるやり取り」	共訳	2006/7/1	金剛出版	現代自己心理学派のDr. Lichtenbergが自己心理学的な理論に基づいた臨床の実際を自身の症例の記録を提示して解説した書を共訳で出版した。解説では現代自己心理学に基づく治療の10の原則を明らかにし、それらの原則が従来の伝統的精神分析の原則とどう異なっているかを明確化している。Dr. Lichtenbergが提唱した動機づけシステム理論の視点から治療者の介入がどういった目的でなされているかを具体的に示している。(監訳者角田豊 訳者：葛西真紀子・森田慎・青柳寛之・竹田

6. 「現場に活かす精神科チーム連携の実際」	共著	2006/7/1	創元社	<p>伸子、伊藤俊樹・安村直己。安村は第10章 pp249-284を分担訳出した。</p> <p>精神科医、臨床心理士、精神科ソーシャルワーカーの三職種が、それぞれの専門性を発揮しながら連携し合うにはどうすればいいかを実践的に論じた。精神科臨床の現場で必要な知識として、三職種の特徴的な視点を事例ごとに明らかにし、連携の工夫について考察した。第2章3節「集団精神療法」第4章7節「転換性障害・解離性障害」12節「統合失調症」を執筆。(pp. 47~50, pp. 153~166, pp. 218~232) 著者：藤本修、水田一郎、丸山総一郎、東牧子、安村直己 他。</p>
7. 「きょうだいメンタルヘルスの観点から分析する」	共著	2009/7/1	ナカニシヤ出版	<p>これまで家族研究の中で取り上げられることが少なかった「きょうだい関係」に焦点を当て、メンタルヘルス的な観点からその特徴と諸問題を概説し、それらを事例検討を用いながら包括的に論考した。第6章「メンタルヘルス事例にみるきょうだい葛藤」の第3節「パーソナリティ障害」及び第7章「家族療法からみたきょうだい関係」を執筆。 (pp. 163~179, 163~170, pp. 191~201) 著者：藤本修、東牧子、荒賀文子、安村直己</p>
8. 「メンタルヘルスへのアプローチー臨床心理学、社会心理学、精神医学を融合して」	共著	2009/7/1	ナカニシヤ出版	<p>メンタルヘルスに関するさまざまな諸問題について、臨床心理学の立場と社会心理学、精神医学の立場から、それぞれの専門家が各テーマを論じた。最終章では学際的に各専門家間で討論を行なった内容を掲載した。安村は第3章 第2節「家庭ライフサイクルにおけるメンタルヘルス」を担当 (pp. 41~59) し、家族の各ライフステージに特有のストレスとそれへの対処法を論じ、現代における家族の問題を考察した。 (著者：西村健、藤本修、高橋依子、白樫三四郎、竹内亜古、安村直己 他.)</p>
9. 「ポスト・コフートの精神分析システム理論」	共著	2013/5/13	誠信書房	<p>精神分析家コフート没後の現代の中心的な自己心理学者、バコール、リヒテンバーグ、ストロロー、ラックマン、フォサーギ、コバーンらの新しい自己心理学理論を紹介し、現代自己心理学のシステム論的な視点を概説する。また、詳細な症例を事例を提示し、それらに執筆者が現代自己心理学的視点からコメント、リコメントを行ない、臨床的に諸理論の有用性を検証した。 (著者：富樫公一、角田豊、中西裕紀、葛西真記子、安村直己) 担当箇所：第2章 事例を構成するシステムの理解. pp. 159~169. pp. 188~194.</p>
10. 「共感と自己愛の心理臨床ーコフートから現代自己心理学まで」	単著	2016/9/13	創元社	<p>これまでの自身の論文や学会発表の内容をまとめ直し、体系的に加筆修正したものである。共感的理解は心理臨床家にとって最大の治療手段であるが、その共感の機能やメカニズムについてこれまで日本では十分に研究されてこなかった。しかしコフートから始まる自己心理学派では、自己愛の研究を中心に「共感」の治療要因の解明が進んでいる。それらの研究成果を概説し、個々の研究テーマをさらに臨床的に検討するため、実際の事例を提示しながら「共感」と「健康な自己愛」の視点をさらに臨床実践として深めることを試みた。</p>
(学術論文)				

1. 「プレイルームへの入室を拒否した夜尿児の遊戯療法—現実と非現実の狭間で—」	単著	1986/10/1	大阪教育大学障害児教育紀要 第9号	遊戯療法はプレイルームという非現実の空間を設定して行なうことに治療的な意味があるが、この設定に対して不安を抱く子どもがいる。しかし、そうした混乱も治療が進むにつれて消失していくことが多い。それは、子どもが現実と非現実の葛藤を乗り越えていく過程と並行している。本論文では、そうした混乱を呈した夜尿児の遊戯療法過程を検討し、現実と非現実の意味について論じた。(pp. 37～47)
2. 「器質性障害児の遊戯療法」	単著	1987/10/1	大阪教育大学障害児教育紀要 第10号	先天的な器質性の障害を負った子どもは、成長過程においてさまざまな心理的問題のために精神的自立の機会を逸して、二次的に精神発達が障害される恐れがある。器質性障害児の治療には、医学的な治療に加えて、子どもの精神的自立を援助するための心理療法が必要となる。本論文では、母子分離に遅れが指摘された器質性障害児の遊戯療法の治療経過を検討し、傷ついた子どもの精神的成長の道程について考察した。(pp. 77～90)
3. 「重症対人恐怖症の統合的治療」(査読付き)	共著	1996/11/1	心理臨床学研究 第14号1巻	家族に問題があると家族療法を求めて来所した人格障害水準の重症対人恐怖症の患者への6年に渡る個人療法と家族療法を統合して行なった統合治療の終結例の治療経過を報告し、人格障害水準の治療には、家族システムレベル、対人関係レベル、個人精神内界レベルへの治療を重層的に行い、それらの治療の相互作用を計り、それぞれの効果を統合することが必要なことを、事例の経過をもとに臨床的に論じた。(pp. 86～97) 著者：松田孝治、安村直己
4. 「思春期症例を通して見た変動する家族についての一考察」(査読付き)	単著	1996/12/1	家族療法研究 第13号3巻	価値観の多様化や自己愛傾向など、現代社会が抱える問題が家族に与える影響について、ある思春期の不登校の事例を通して考察した。有名中学への登校を拒否した長男は、今日の自然破壊を憂い、両親は古いや靈感など神秘主義的な世界に没頭していた。現代における家族は、技術の世界と超越の世界とうアンビバレンツを抱える容器とならなければならないことを論じた。(pp. 34～39)
5. 「境界線人格障害の精神分析的治療—支持的技法および表現的技法—」(査読付き)	共著	1999/4/1	精神分析研究 第43号5巻	境界線人格障害に対する精神分析的治療の有効性や必要な支持的技法と表現的技法について論じたDr. Horwitzの論文を紹介し、メニングァー財団で長年にわたって行なわれた精神療法研究の成果や、精神分析的治療の支持的技法と表現的技法のさじ加減、またそれぞれ禁忌となる条件などについて論じた。著者：高橋哲郎、安村直己 (pp. 47～58)
6. 「兄弟ともに不登校に陥った両親へのアプローチ—親機能のバランスの解体と再生について—」(査読付き)	単著	2004/7/1	心理臨床学研究 第22号1巻	兄弟が共に不登校に陥った事例で、両親面接によって問題が解決した終結例の治療過程を報告し、両親サブシステムの機能不全の回復過程について検討した。その結果、親機能には、子どもの自主性を尊重する「任せる機能」と、子どもを適切な方向に導く「ガイドする機能」があり、その両機能のバランスが破綻したとき、子どもに問題が生じることを論じた。また、兄弟間の補償作用が親機能を保護していることが示唆された。(pp. 23～33)
7. 「精神療法の指針としての共感体験について」	単著	2005/12/1	甲子園大学紀要 第33号	ハインツ・コフォートは精神分析的治療における共感の機能について論じ、情報収集として

8. 「土居の甘え理論とコフートの自己心理学について」	単著	2006/12/1	甲子園大学紀要第34号	<p>の共感の機能を指摘した。本論文では治療者自身の共感的な主観的体験が、その後の治療の治療プロセスや方向性法を示唆するガイドラインとなって治療的に作用することを論じた。さらに自経例を通して治療者の共感体験の様相についてさらに具体的に検討し、さまざまな共感の機能について考察した。</p> <p>土居健郎はしばしば著作の中でコフートに言及し。コフートの自己対象欲求は「甘え」であると論じているが、土居の甘え理論はコフートの自己心理学理論と多くの点で類似しているように思われる。そこで本論文では、土居がコフートを引用した箇所を検討し、コフートの自己対象転移の断絶と修復は、土居の言う「甘えの危機」として考えることができることを論じた。また、理想化には「素直な理想化」と「屈折した理想化」があると見ることができるところを考察した。</p>
9. 「臨床場面における治療的相互交流の共同構築について」	単著	2007/12/1	甲子園大学紀要第34号	<p>現代の精神分析は、治療者の客観的科学性に基づいた正確な解釈による治療という、自然科学モデルから、治療者と患者の関係性による治療体験の創造という関係性モデルへと変化している。そして、治療的な転機は、治療者と患者の相互交流によって共同構築されると考えられるようになってきている。そこで自経例の中から、そうした相互交流のいくつかを具体的に検討し、その治療的相互交流の構造について考察した。</p>
10. 「間主観的アプローチから見た治療的やり取りの検討」	単著	2008/12/1	甲子園大学紀要第35号	<p>コフートの自己心理学から発展した間主観性理論は、現象学的な議論や哲学的思索を含み、難解な理論的側面を有していた。しかし、そのアプローチは極めて臨床的な治療感覚を提示しているように思われる。そこで、筆者の臨床例のやり取りのいくつかを間主観的視点から詳細に検討し、間主観的なアプローチの実際的な有効性を検証した。</p>
11. 「ロジャースとコフートの理論と臨床における接点について」	単著	2009/12/1	甲子園大学紀要第36号	<p>本論文ではロジャースのクライエント中心療法とコフートの自己心理学的治療を理論的、臨床的に比較検討することを試みた。その結果、両者は、クライエントの自己体験のあり方に焦点を当て、自己をより良く体験することを治療の方向性としていることで共通していた。しかしロジャースは共感そのものを、コフートは解釈を第一義とする点が異なっていた。最後に自経例を検討したところ、治療が有効に進んでいく際には、共感と解釈は渾然一体となって生じていることが示唆された。</p>
12. 「自己愛障害をめぐる現代のユング派とコフートの接近について」	単著	2010/12/1	甲子園大学紀要第37号	<p>現代のユング派は自己愛障害の分析治療に精力的に取り組んでおり、しばしばコフートを引用している。本論文では、そうした現代のユング派の自己愛障害に関する分析を概観し、コフートの自己心理学の視点と現代ユング派の視点を比較検討する。そこでは多くの一貫性が見られたが、セルフの概念については大きな相違点が見られた。最後に自経例の検討を通して、コフートの理論にユング派のイメージを重ねることが臨床的に有効であることが示唆された。</p>
13. 「精神療法における自己愛と甘えの問題について」	単著	2011/12/1	甲子園大学紀要第38号	<p>ナルシシズムの概念は、フロイト以来、その理論的複雑さから多くの問題が指摘されてきた。近年、自己愛人格障害の診断名が登場</p>

14. 「悲劇人間」の精神分析ーハインツ・コフートと自己心理学ー	単著	2012/12/1	甲子園大学紀要第39号	<p>したこともあり、病理的な自己愛と健康な自己愛に混乱が生じていると考えられる。本論文では、そうした自己愛をめぐる歴史的語論を概観し、さらにそこに土居の甘え理論から自己愛の問題を臨床的に検討する。最後に自経例を提示し、「自分がある」状態と健康な自己愛の関連性を考察した。</p> <p>新しい精神分析的自己心理学を打ち立てたハインツ・コフートは、自らの人間観を「悲劇人間」とし、フロイトの「罪責人間」とは異なった視点から分析治療を行なった。コフートの視点は、現代人の自己愛の問題を捉えており、今日の臨床場面において「悲劇人間」の視点は臨床的に有効であるとされる。本論文では、コフートの症例と筆者自身の症例を検討し、現代における自己愛の問題とコフートの自己心理学の汎用性について考察した。</p>
15. 「現代自己心理学における共感の探究」	単著	2013/12/1	甲子園大学紀要第40号	<p>現代自己心理学において近年探究されている治療者と患者の共感的相互交流プロセスの最新の研究を概説し、さらに成人の精神分析とのつながりが指摘されている現代における乳幼児研究の成果との関連を概観することを通して、それらがいかに現代自己心理学の知見と一致しているかを考察する。また、筆者自身の臨床事例を現代自己心理学の視点から検討し、在と不在に揺れる治療者と患者の相互交流から間主観的な心が生成することを臨床的に論じた。</p>
16. 「フロイト的治療態	単著	2015/12/1	甲子園大学紀要第42号	<p>フロイト的態度といわれる治療者の中立性匿名性、受身性をめぐる「禁欲原則」を現代精神分析の観点から再検討した。特に現代自己心理学派では、患者の欲動を禁欲させる視点ではなく、患者が必要としている自己対象欲求を満たすことを治療的とする視点が優勢を占めており、むしろ「至適応答性」いう概念によって治療者の態度が見直されていることを示した。</p>
17. 「発達臨床心理センターにおける子育て支援事業の経験をふり返って」	単著	2018/3/20	甲子園大学紀要第45号	<p>甲子園大学発達臨床センターがこれまで長年実施してきた子育て支援事業である「無料発達相談」と「きらきら子育て講座」（宝塚市と共催）の活動をふり返って、近年の若い母親たちが子育てに関する知識や助言を切実に求めており、子育て講座へのニーズが非常に高まっている現状を報し、それへの対策はどうあるべきか、母親が求めているものはいったい何なのかについて考察し</p>
18. 「親面接」再考	単著	2019/3/20	甲子園大学紀要第46号	<p>親面接は教育領域や医療領域、福祉領域など広範囲で盛んに実施されているが、その親面接の基本的進め方や技術、視点などは統一されたものが少なく、あまり議論されてこなかった観がある。そこで日本における親面接発展の歴史を概観し家族療法との関係について検討しながら、標準親面接において家族療法の視点や技法が十分援可能であり、より多様化する家族問題に対してそうした多角的アプローチに基づいた親面接がより効果的であり、求められることを考察した</p>
(その他) 1. てんかん発作をもつ不登校児Tの治療過程	単独発表	1986/8/1	日本心理臨床学会5回大会（大阪）	<p>先天性の器質的障害をもつ不登校男児のプレイセラピー過程を報告し、プレイ空間の中で象徴的に自己の傷つきが再現、修復され、精神的成長が見られたことを考察し、</p>

2. 大人になりたくない 留年高校生のカウンセリング	単独発表	1988/7/1	日本心理臨床学会7回 大会（東京）	プレイセラピー空間の治療作用について 討論した。特にプレイの中で象徴的な「死 と再生」の表現が多数見られたことを取り 上げ、自己の修復と再生が行なわれた点を 考察した。
3. プレイセラピーに おける制限について	単独発表	1989/9/1	日本心理臨床学会8回 大会（東京）	プレイセラピーにおける制限の必要性と その治療的意味について、複数の事例を 例示しながら検討した。治療者との制限を めぐる対決が治療に必要な実存的対決につな がることが考察された。特に、セラピストの 許容範囲が限界に達した際に、実存的な対決 が生じやすく、クライアントはそこを 無意識的に期待してそうした制限破りの行動 を起こしていることが考察された。
4. 強迫症の家族研究	単独発表	1991/9/1	日本心理臨床学会10回 大会（京都）	強迫症の患者の家族の性格特徴、家族関係、 多世代伝達の特徴、遺伝要因、体質などに 15家族を調査した。家族には患者と同様に 強迫傾向が見られ、一族の栄枯盛衰の大きな 変動が見られた。そうした多世代に渡る不安 定性が患者の精神状態に影響を及ぼしている 可能性が考えられ、特に家系の栄枯盛衰は、 長男的なポジションにある患者にとっては 自己の家族からの分離欲求と家系への忠誠心 の葛藤を引き起こしていることが考察された。
5. 対人恐怖症者の対象 関係の一考察	単独発表	1994/9/1	日本心理臨床学会13回 大会（京都女子大学）	分離固体化の発達においてパーソナリティー 障害の水準であることが疑われる重症の対人 恐怖に患者への個人精神療法の治療過程を 報告し、患者の内的対象関係の問題を考察 した。特に患者の語った多くの夢を詳しく 分析し、対象関係における侵襲的相互関係 の存在とその特徴について考察した。治療 において統合的なさまざまなアプローチを 用いたことで個人精神療法の探索を促進し たことが示された。
6. 思春期症例を通して みた変動する家族について の一考察	単独発表	1996/5/1	日本家族研究家族療法 学会第13回大会 （大阪）	学会企画シンポジウムに、シンポジストと して発表した。現代社会の問題が家族に与 える影響を、不登校の家族療法の事例を通し て考察した。事例では、両親が生活上の不安 や見通しのなさから占いに傾倒しており、 その影響を受けた長男が不登校に至った経過 を報告し、子どもが現代社会に内在する矛盾 や不安への対処と解決の方向性を求め、問題 行動を起こしていることが考察された。
7. 境界性人格障害の両親 への家族療法—ヒエラル キーの逆転について—	単独発表	1998/6/1	日本家族研究家族療法 学会第15回大会 （熊本）	境界性人格障害の患者の両親へのアプローチ について、複数の治療例を例示して、治療 の留意点について、家族構造のヒエラルキー の逆転を早期に治療する必要について述べ た。患者が、自身の精神症状の原因を両親に 転嫁し、激しく両親を攻め立てていた症例で は、両親は罪悪観を抱き、子どもに対して 必要な介入が不可能になっており、そのこと が問題を悪化させていることが考察された。
8. 抑うつ状態の中年	単独発表	1999/9/1	日本心理臨床学会19回	抑うつ状態の中年女性への個人心理療法の

女性への支持・表情的精神療法—治療プロセスの自己心理学的考察—			大会（京都文教大学）	治療プロセスを検討した。治療では患者の自尊心を支え、人生後半への課題に向けて健康な自己愛を育む自己心理学的な視点を提示した。中年期は、これまでの人生において達成したことに自己価値観を見出せなければアイデンティティの拡散に至る危険のある時期であり、中年期の患者の健康な自己を支える介入が必要になることを考察した。
9. 兄弟で不登校に陥った家族へのアプローチ—親機能の解体と再生—	単独発表	2002/9/1	日本心理臨床学会21回大会（中京大学）	兄弟が共に不登校に陥った家族の両親面接を継続し、問題が解決した治療プロセスを検討した。そこで親機能のバランス不全の治療についての視点を提示した。兄弟はまったく異なるタイプの不登校事例であったため、治療者はその違いを重視し、まったく異なる介入を両親に行なった。そこには、両親の親機能のアンバランスさが影響しており、兄弟の不登校は結局、親機能の回復を促すものであることがシステム論に基づいて考察された。
10. 恋愛関係に陥ると混乱した青年期患者の治療過程	単独発表	2003/5/1	日本心理臨床学会22回大会（京都国際会館）	異性関係で混乱する境界性パーソナリティ障害の男性患者への個人精神療法の治療経過を報告し、その共感的介入について検討した。患者は分離個体化に問題があり、彼女との一体感に執着し、彼女との離別に対して破滅不安に襲われた。患者はそうした自己が消滅する不安を面接において明確に言語化することができ、治療者が深く共感することで、逆に患者との間に治療的な自己対象的結びつきを生み出した経過を考察した。
11. 家族療法と個人療法の統合について	シンポジスト	2002/5/1	日本家族研究家族療法学会第19回大会（東京）	自主シンポジウムを企画し、家族療法と個人療法の統合をテーマにシンポジウムを行なった。筆者は、その際の治療者間のチームミーティングで個人療法の担当者と家族療法担当者、および主治医が情報を適切に交換し、チーム治療の影響がどのように現れているかをきめ細かく検討することの必要と、チームにおける互いの立場や専門性の尊重を留意することなど、注意すべき点について考察した。
12. 自己心理学を学ぶ	シンポジスト	2005/9/1	日本心理臨床学会24回大会（京都国際会館）	自主シンポジウムを企画し、コフトから始まる自己心理学発展の歴史を概観し、更に現代の自己心理学派の理論や視点、治療技法について紹介し、その有効性について討論するシンポジウムをその領域に詳しい専門家と共に連続で毎年さまざまな学会で開催した。以下は、その中で筆者もシンポジストとして企画・参加したものである。
13. 自己心理学を学ぶ—その2	シンポジスト	2006/9/1	日本心理臨床学会25回大会（関西大学）	自主シンポジウムを企画し、リヒテンバーグの著書中のケースを検討し、その後、事例検討を行なってフロアーと討論を行なった。
14. 現代自己心理学の基礎と臨床Ⅱ	シンポジスト	2007/12/1	第1回精神分析的心理学療法フォーラム（甲南大学）	自己心理学における「自己—自己対象関係」の概念を概説し、その後、事例検討を行なってフロアーとディスカッションを行なった。
15. 現代自己心理学の基礎と臨床Ⅱ	シンポジスト	2008/12/1	第2回精神分析的心理学療法フォーラム（甲南大学）	現代自己心理学における「観主観的アプローチ」を概説し、その後、事例検討を行なってフロアーとディスカッションを行なった。
16. 現代自己心理学の基礎と臨床Ⅱ	シンポジスト	2009/5/1	第3回精神分析的心理学療法フォーラム（甲南大学）	現代自己心理学における「相互交流理論」を概説し、その後、事例検討を行なってフロアーと討論を行なった。
17. 現代自己心理学の基礎と臨床Ⅱ	シンポジスト	2009/9/1	日本心理臨床学会28回（東京国際フォーラム）	自主シンポジウムを企画し、現代自己心理学のリヒテンバーグの理論を紹介し、その後、事例を検討し、フロアーと討論を行なった。

18. 現代自己心理学の基礎と臨床Ⅱ	シンポジウム	2012/8/1	日本心理臨床学会32回大会（愛知学院大学）	自主シンポジウムを企画し、現代自己心理学のコバーンの理論を紹介し、その後、事例検討を行なってフロアーと討論を行なった。
--------------------	--------	----------	-----------------------	---

（注）

- 1 この書類は、学長（高等専門学校にあつては校長）及び専任教員について作成すること。
- 2 医科大学又は医学若しくは歯学に関する学部若しくは学部の学科の設置の認可を受けようとする場合、附属病院の長についてもこの書類を作成すること。
- 3 「研究業績等に関する事項」には、書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。
- 4 「氏名」は、本人が自署すること。
- 5 印影は、印鑑登録をしている印章により押印すること。ただし、やむを得ない事由があるときは、省略することができる。この場合において、「氏名」は、旅券にした署名と同じ文字及び書体で自署すること。